

作・マクラツム

テーマ「川島瑞樹と夢」

「川島さん：川島さん：？」

高垣楓のか細い声がうつらうつらとし始めた瑞樹を起こそうと囁く。

「川島さん、ここ最近根を詰めてお仕事していたみたいですね…ふあ…」

同席していた三船美優もつられて欠伸が出始めていた。

三人がいるのはいつもの居酒屋ではなく、高橋礼子が鼻肩にしている招待制のバーである。レッスン終わりにいつもの店に行こうかと話していた時に、礼子から連絡があり、自分の馴染みの店を紹介してくれたのだ。

静かな店内でアイドルとして警戒する必要がなかったため、美優はもちろん、珍しく瑞樹も酒に飲まれてしまった。楓は二人が泥酔していくのを酒の肴にして、新たにウイスキーをグラスに注ぎ始めた。

夢心地だった瑞樹は、あっけなく、だが深く意識の奥底へ沈んでいった。

：あら？寝ちゃった…？飲み過ぎたかしら…？

「川島さん！起きてください！」

瑞樹が伏していた机から顔を上げる。

「…へ？」

瑞樹が目にしたのは、美優や楓ではなく、アナウンサー時代の同僚だった。

「あれ？なんであなたが？ていうかここお店じゃなくて…」

「まだ寝ぼけてるんですか？これから中継始まりますよ。原稿です」

「え？中継？ええ…？」

「まだ昨日のお酒が残ってるんですか？でも川島さんが酔うのも珍しいですね…出張後の部長との飲みが長引いたんですか？」

「…ええ、まあ、そんなところ？かしらね？」

「それじゃ自分は戻りますんで、よろしく願います！」

部屋に一人残された瑞樹は落ち着いて状況を確認する。アルコールは既に抜けきり、状況の整理に支障はきたさなかった。

まず自分がいる場所はテレビ局の控え室。しかし普段自分たちが入る部屋とは趣が異なる、実務者用の部屋だ。先ほど渡された手元の紙は、瑞樹がアナウンサー時代に出演していた朝番組の原稿である。

ここまでならバラエティ番組のドッキリコーナーだった可能性を考えていた。次に瑞樹は、自分が身につけているものを確認する。

着ている服：昨夜と同じ服だが、まだ新しい。確か、アナウンサー時代に購入した服だ。携帯…これも瑞樹の物、だがスマートフォンではなく、ガラケーだ。

そして衣服や私物が変わっているのは明らかにおかしく、また瑞樹の個人情報込みで同じ携帯を持ち込むのも不自然だ。ありえない物証を全て排除してなお残った事実を、瑞樹は信じられなかった。

これは、夢では、ないのか。

「中継、十分前です！」

「ハ、ハイ！」

カメラの前に、マイクを持って立つ

「おはようございます、川島瑞樹です」

「今日の天気はおおむね曇り、ですが時折にわか雨があります」

「夜には雨に変わってしまうので、傘を持っていた方が安心かもしれません」

「それでは気をつけて、いってらっしゃい♪」

朝のお天気コーナーはアナウンサー時代にルーチンとして瑞樹の生活に入っていた。そのため久しぶりの事ではあったが、そつがなくこなすことはできた。

「川島さん、おつかれ様でした！」

「はい、お疲れ様」

「じゃあ自分、はこれからディレクターと打ち合わせ行くので、これで」

ひとまず危機は乗り越えたが、現状を瑞樹自身が認めることができていない。

自分がいるのは「アナウンサー川島瑞樹」だった時代だ。突拍子もない出来事を、瑞樹自身が上手く飲み込めていない。だが自らを取り巻く環境全てが、人為的なものではない、まじう事なき現実として存在している。

瑞樹は現状への思考を一旦止め、鞆の中にあつた手帳を開く。分刻みのページには、出演番組のタイムスケジュールがびっしりと書き込まれている。

「あー…確かにここにいた時はこんな感じで組んでたわね…」

今は午前八時過ぎ、この後ローカルバラエティ番組のロケが予定に入っている。

「色々考えないといけない事はあるけど、まず目の前の仕事を片付けなきゃ…」

仮にこの状況を誰かに伝えたとして、誰が信じるだろうか。伝えたところで可哀想な目で見られるのは瑞樹自身が分かっていた。

だからこの問題は自分のみで、自分の手で解決しなければならない。

「頼れるのは自分のみか。プロデューサー君と組む前も一人だったわね、私」

だが、まずは何よりも目の前の仕事だ。

アナウンサーだろうとアイドルだろうと、仕事を放り出す無責任な事はしない。求められた仕事を完璧にこなす、それを自分にも求めるのが川島瑞樹だ。

瑞樹は目を瞑り精神を集中させる。昔から行なっている、オンとオフのスイッチを切り替える一種の儀式だ。

「…よしーさて、ロケの場所は…」

アナウンサー川島瑞樹の一日が、始まった。

幸い、仕事の内容的には難しいものではなかった。むしろ自分の状況がばれないように苦心する方に注力して、普段以上に周囲に合わせるよう意識したためか、常に神経が張った状態の方が辛かった。

今はかつて自分が借りていたマンションのベッドに突っ伏している。

化粧は落とした。

晩御飯も軽く食べた。

明日の番組の原稿もチェックした。

ようやくアナウンサー川島瑞樹の一日が終わった。

「しかしこれから…どうしたものかしらねえ…」

帰宅して人心地ついたせいで、逃れられない問題が瑞樹の心に重くのしかかる。

日付を何度確認しても、今日の日付は瑞樹がアナウンサーとして現役の頃だ。テレビから聞こえてくるのは瑞樹がいた時代では既に終了した番組だ。それらが否応なしに現実を突きつけてくるので、瑞樹は嫌気が指してテレビを消した。

「はあ…」

元に戻る方法は分からない。

瑞樹のタイムトラベルに関する知識はそれを、空想の産物として扱ってきた。

頼れるものもない。

今回のような摩訶不思議な出来事に対して、事務所のアイドル達が何か頼りになるかもしれない。だが瑞樹と同じく、アイドルになっている保証はない。アイドルという接点があれば「未来から来た」などと話せば、怪しまれる以外ない。

「現状はとりあえず…アナウンサー川島瑞樹を突けていくしかないわね」

打開方法が見つからない事に瑞樹は歯がゆさを覚えたが、簡単に解決策など見つからない問題だ。その中で瑞樹ができる最善策は、瑞樹自身がノウハウを持つてい、るアナウンサーを続ける以外にないようだ。

「昔取った杵柄というか…とりあえず、やっていくしかないわね…」

誰に向けて呟いたかわけでもない声は、部屋に虚しく響いた

事態が大きく進んだのは、あるバラエティ番組だった。アメリカでアーティストを発掘するオーディション番組の日本版スペシャルを瑞樹がリポートする予定だった。

一方で事務所やテレビ局がプッシュするアイドルも一定数おり、その成長過程を放送するのを番組のウリとしてもしていた。

本来なら特集用の映像を収録し、瑞樹がレポートをして終了の予定だった。

「へ？来られない？！」

楽屋の近くで、番組ディレクターが青い顔で通話をしている。

「えーいやマジですか…はい…はい…わかりました」

「どうしたの？何かトラブった？」

ディレクターは頭を抱えて唸っている。ブックングミスでレポートするアイドルの対バン相手が来られなくなっただけならいい。それだけならよくあるトラブルで片付けられるが、問題は番組構成上「アイドルと競り合う」絵図が欲しい事だ。

本来は歌とダンスに実力がある演劇畑の役者を充てる予定だったため、同じ動きをできる人間を見繕うのは難しい、このままでは企画自体が流れてしまう。

「じゃあ、私が代わりにやりましょうか？」

「へ？川島さん？できるの？」

ディレクターは虚を突かれていた。予想外の人物から助けが飛んできたのだ。

「歌はまあこの仕事やってんだから声は出せるわよ。あと踊りは…体が付いてくるか分からないけど、曲次第ね」

瑞樹が何でもなしのように肩を疎める

「いや、できるならそれに越したことはないんだけど…川島さんは大丈夫なの？」

ディレクターも瑞樹の提案を飲むか迷っている。彼からすれば渡りに船である。コーナーを潰す事と瑞樹の提案を天秤にかけてれば、後者に傾くのは当然だ。

一方で瑞樹の行動は未知数だ。どのような展開になるか予想できない。瑞樹の事を案じている一方で、瑞樹がオーディションをこなせるかも懸念している。

だがここで、瑞樹が悩んでいるディレクターの退路を断つ。

「私が代役でやっても、誰も損しないわよ？」

「仮に私がドジやってもそのシーンが撮れば、年末特番に使えるじゃない？」

「どうかしら、そっちにとっても、悪い話じゃあないと思うけれど…？」

ディレクターの最大の懸念は瑞樹の面子を潰す事で、テレビ局との関係値が崩れる事だった。それを結果として別口で利用できれば、誰も損はしない。

「…わかりました、川島さんをお願いします…自分は先に運営に連絡してきます」

「OK、私は衣装とステージの確認してくるわね」

「はい…ありがとうございます！」

瑞樹はオーディション概要に目を通す。アイドルがそれぞれステージ上でパフォーマンスを披露し、歌、ダンス、ビジュアルの三点からチェックされる。

「…よし！」

瑞樹はいつもの様に精神を研ぎ澄まし、オーディションに備える。

アイドルとしての初めてのライブは、新しいステージで気が張り詰めていたが、その時はプロデューサーが声をかけたことで緊張がほぐれた結果、うまくいった。

今、プロデューサーはいない、だがそれ瑞樹にとって過去の話である。

「川島さん！そろそろ本番です！」

「はい、お願いします！」

実はこの時、番組ディレクター、アイドル達、そして瑞樹の三者の捉え方が、それぞれ大きく異なっていた。

ディレクターが瑞樹の行動をいちアナウンサーの張り切りとして見誤った事。

オーディションの参加アイドル達が、瑞樹をライバルとして見ていなかった事。

そして何より、瑞樹自身が競い合う相手に飢えていた事。

「さあ、小娘になんか負けてあげないわよ」

三者それぞれが予想だにしていなかった。瑞樹が圧倒的な実力で現役アイドル達を振伏せ、有無を言わせぬ結果でオーディションに合格してしまう事を。

結果として、オーディションは大いに盛り上がった。

「現役アナウンサーがアイドルに快勝」というテレビ映える絵面が取れたため、視聴率も好調だった。テレビ局側も非常に好印象で、今後瑞樹を「歌って踊れるアナウンサー」として大々的に売り出す方針も検討しているそうだ。

瑞樹はその褒美として、都内での企画会議を終え、番組関係者の打ち上げに参加している。居酒屋でディレクターが瑞樹の前にやって来て、頭を下げる。

「いや、川島さんには本当に助かりました！」

「別にそんな大げさなことじゃないわ、偶然よ、偶然」

「そんな偶然だなんて…審査員の方々、度胆を抜かれてましたよ？」

実際、瑞樹からするとオーディション審査員の要求点はかなり下だった。新人アイドルの発掘が目的であるため、審査員が重視するのは今後への期待性だ。

だが今の川島瑞樹は高垣楓とユニット曲を歌った後である。

歌、ダンス、ビジュアル：瑞樹はかつてシンデレラガールへと上り詰めた楓を間近に見ていた。アイドルの頂点の側に並び立った瑞樹からすると、今回のオーディションはどうしても物足りない物に思えた。

「またそんな謙遜して…でも一体いつあんな激しいダンスを覚えたんですか？」

「まあそれは…普段のトレーニングの一環よ」

瑞樹が当たり障りのない返答をする。

「でも川島さんもしかして、結構アイドルとか向いてるんじゃないですか？」

「…そうね…それもありかしら！」

瑞樹が求めているステージ。そのせいなのか、少し油断してしまった。上手く乗せられたのも相まって、あっという間に三件目までやって来た。

「…あら…？」

その店は奇しくも、楓、美優と共に来ていた場所だった。

「あれ、川島さんここ来たことあるんですか？」

「…いや、たぶん気のせいね」

間違いない。店の外観も場所も同じだ。瑞樹は緊張した面持ちで扉を開けた。

「…いらっしやいませ」

人目を忍ぶ芸能人御用達の店らしく、店内は少し薄暗い。バーテンダーらしき女性が、カウンターへと瑞樹を勧める。

「随分と飲んでらっしゃるようで…3件目くらいですか？」

「ええ、そんなところ…正直、お酒はもう十分って感じですね…」

「では、アルコールを抑えた物はどうでしょう？」

瑞樹の了承を得たバーテンダーは要領よく材料取り出す。

シェイカーの動きに合わせて、二つに結った彼女の髪が波打つ。

「では、どうぞ…『ボヘミアン・ドリーム』です」

バーテンダーから差し出されたカクテルを口にする。甘い口当たりと、炭酸の辛さは、カクテルというよりソフトドリンクに近かった。

だが、それまでに複数のアルコールを口にしたらだろうか。今まで飲んできた分のツケが来たのか、瑞樹は意識が沈んでいくのを感じた。

「すいません…ちょっと…寝ちゃうかも…」

「ええ、ですがお連れ様もいますので、何も心配することはありません…」

何が起きても、一時の夢のようなものです…

…さん：瑞樹さん…

誰かが、自分を呼ぶ声がする…

「んう…」

「ああ、瑞樹さん、起きられたんですね」

瑞樹が目にしたのは、眠っている美優と、それを肴にしている楓の姿だった。

「あれ？…ここは…？」

「礼子さんお勧めのバーですよ、場所を忘れるまで酔うなんて…珍しいですね」

「え…え、ええ…初めての場所だから緊張しちゃって」

瑞樹はうろたえた様子で、鞆を探る。スマートフォンを取り出して日付を確認すると、覚えている限り瑞樹が店にいた時と同じだった。

「ふふふ…もういい時間ですから、そろそろ出ましようか？」

気が付くと美優もまた眠っている。二人の寝顔を堪能しきったのだろうか。珍しく楓から帰宅するという選択肢を提案してきた。

未だ戻ってきた実感の無い瑞樹は、楓に腕を掴まれながら店を後にした。タクシーの中で、瑞樹は一人黙想する。本当に酔った挙句に見た夢だったのだろうか。瑞樹は夢心地の中で釈然としないまま、アイドルとして帰路に着いた。

「…という事があったんです」

後日、ひとしきり話した瑞樹の目の前には、柊志乃と高橋礼子が並んでいた。二人ともグラス片手に瑞樹の語り聞くに徹していた。

「真面目なような、不真面目なような…ふわふわした内容ね」

「ある意味、私たちがみたいなふわふわした人たちに話すのが一番というわけね」

志乃も礼子も、瑞樹の話を肯定も否定もしない。二人にとって、この話が事実かどうかはさして重要ではないらしい。

「ところで、アイドルになる前のアナウンサーの仕事は楽しかったの？」

「ええ。アイドルという選択肢が無かったら、アナウンサーは続けてました」

礼子の問いに対して、瑞樹はきっぱり返す。

「即答ね、少しくらい悩むかと思っただけ」

「アイドルへの転向は分岐点でしたけど、挑戦する場所が変わっただけですね」

「でも夢の中でも結局、アイドルを楽しんでるのね…」

志乃がグラスを傾け締める一方で、礼子はなぜか釈然としないものを感じた。

「…他にも何か言っておきたいこと、あるんじゃないかしら？」

「言うだけ言っておいた方がいわよ。明日には忘れていくかもしれないし…」

見破られていた。瑞樹はこの二人が長年の経験で培われたであろう観察眼を侮っていた。同時に、彼女達からその言葉を引き出させてしまった事を痛感した。

口の中で嘔みしめものを吐き出すように、瑞樹がぼつりぼつりと呟いていく。

「…わからないんです。今の自分が夢から覚めているのか、まだ…夢を見ているのか…今の自分も、アナウンサーの自分も余りにも現実感があって…」

「ふと考えちゃったんです。今自分は現実にいるのか、まだ夢を見ているのか…」

三人の間を沈黙が覆いかぶさる。

どれくらい経ったろうか、礼子がそれを破るように話し始める。

「…最近入った子曰く、アイドルは現れては消えていく、飛沫のようだって…」

「そこまで詩的な表現じゃないけど、言いたい事はなんとなく理解はできるわね」

彼女の場合は言い方に問題はあったが、瑞樹もその時思うところが多少あった。志乃がそれに付け加える。

「それに、…正しただけで判断できない『灰色の物事』なんて、よくある話よ」

「瑞樹ちゃんかわからないなら、私たちも猶更判断できないわよ」

「私たちができるのは、その時を楽しんでいる姿を見せるだけ」

「さすが、ステージにボトル持ち出した女が言うって違うわね」

礼子が最後に茶々を入れたのが可笑しくて、瑞樹も笑い始めた。

「御三方、何か飲まれますか？」

グラスが空いたのに気づいたのか、バーテンダーが尋ねてくる。

「じゃあ最後に軽いのをもらえるかしら？」

「ええ、わかりました」

バーテンダーの慣れた動きに合わせて、二つに結った髪が波打つように揺れる。

「どうぞ、『ボヘミアン・ドリーム』です」

三人の手元にピンクのカクテルが添えられる。瑞樹は驚きつつも、含んだ笑みを浮かべながら、カクテルを口にする。

彼女の悩みは、グラスから出る泡の中へ溶けていき、どこかへと消えていった。